昭和25年３月14日　第三種郵便物承認　令和４年２月１日発行（毎月１回１日発行）通巻870号

# 禪の友

—Zen no Tomo—

2
February 2022

# 【釈尊涅槃会・報恩大摂心会】

大本山永平寺
☎〇七七六・六三・三一〇二

二月十五日は釈尊（お釈迦さま）がお亡くなりになった日です。

大本山永平寺では、二月一日から十四日まで法堂東側の室中に大きな涅槃図のお軸を掛け、その前に香華燈燭等をお供えいたします。毎夕方には「仏遺教経」を読誦してご供養し、十五日には「釈尊涅槃会」を修行いたします。

三十五歳でお悟りを開かれた釈尊は、四十五年もの間、インド各地を巡歴して正しい仏法を伝えられました。八十歳になった釈尊は旅の途中、鍛冶屋のチュンダより供養された食事で中毒を起こして病にかかられましたが、釈尊は弟子たちにチュンダを責めないよう諭されたそうです。病身をおして最後の沐浴をされ、クシナガラの村外れの沙羅の林で最後をむかえられました。これらのお話は、「仏遺教経」や「大般涅槃経」等によって伝えられました。

また永平寺では二月一日から七日までの間、釈尊のご恩への「報恩大摂心会」も修行いたします。暦の上では立春を迎えますが、雪の降る寒い中、修行僧は一週間の間、ひたすらに報恩の坐禅修行をいたします。

一週間続く坐禅修行は大変に困難なことですが、共に永平寺で修行の日々を過ごす法友、清浄大海衆の僧宝功徳によって今年も釈尊への報恩大摂心会が修行されております。

報恩大摂心会・釈尊涅槃会が終わると、いよいよ新たな修行僧を迎える季節となります。

春の訪れと共に、永平寺へ仏道を求める新たな雲水の到着を知らせる木版の音が、幽谷の山内に響き渡ることでしょう。

ご本山だより

# 大本山總持寺

## 【節分追儺式と涅槃会】

大本山總持寺
☎〇四五・五八一・六〇二一

總持寺の大涅槃図

節分とは、「鬼を追い払って新年を迎える、立春の前日の行事」です。二十四節気において立春は新年の始まりで、節分は大みそか的な日。旧暦の大みそかとも日付が近く（時に重なることもありました）、江戸時代までは同じように一年の締めくくりの日でした。鬼を追い払う行事は、「おにやらい」（追儺）という宮廷の行事が発祥だそうです。

おにやらいは、宮中ではだんだんと廃れて行われなくなるのですが、各地の寺社が形を変えて受け継がれ、庶民にも浸透していきました。

本山では二月三日にこの節分追儺式を大祖堂にて年男、年女、著名人をお迎えし盛大に行われておりましたが、昨年は感染症の為、山内のみで御祈祷法要が勤められております。今年も感染状況を考慮しつつの開催になるかと思われます。

また二月十五日はお釈迦さまのご命日である「釈尊涅槃会」があります。大きな涅槃図を掲げて色とりどりの涅槃団子をお供え致し、禅師さまの御親修で法要が執り行われます。

それに因み十二日から十四日までは僧堂で「報恩摂心」が修行されます。

この行事が終わると、修行僧は一定の節目を付けて出身地へ帰ることになるのがこの鶴見の風物詩なのです。

**「涅槃図をおかけんとすなる僧五人」**

高浜虚子

注 ・**おかけんと** とは「お掛けしようと」という意味
・**すなる** とは「するという、するのだ」という意味

# 曹洞 俳壇

## 選・坊城俊樹

### 龍淵に潜み湖底の村巡り

神奈川県　佐野　勇

評　「龍淵に潜む」とは秋分のころ澄んだ湖などに龍が潜むという中国から来た季題。その龍が今は湖底に沈んでしまった廃村を巡っているかも知れぬという句。ロマンがあり哀愁もある。人間は開発ばかりして自然を克服する。廃村はそれらに対するアンチテーゼかも。

### 除雪車もやる気まんまん冬支度

山口県　稲村　みどり

評　なんともコミカルで面白い発想。いよいよ雪が降り始めるころ、冬支度として除雪車も人もそれを待ち構えているのである。実際に雪を掻くのは除雪車であるから擬人法は正しい。実際の労働はそれは大変な苦労だろうが、この句を読むとなぜか力が湧いてくる。

◆ことありて夫と語りし夜長かな　北海道　川上初子

◆筆硯（ひっけん）の穂先鋭し星月夜　埼玉県　伊藤　博

◆藤袴ゆれて二頭の蝶ゆるる　山口県　御江恭子

◆ゴールデンバットに偲ぶ父の秋　福島県　大槻　弘

◆八重山に棚引く雲や文化の日　静岡県　土屋君女

◆終電に熊手駆け込む酉の市　神奈川県　吉田明彦

◆夕霧や浅間残して牛帰る　千葉県　酒井利夫

◆風を背に風を呼びとむ枯尾花　北海道　堺　隆

◆ゆで卵むいて冬日の現はれり　千葉県　須見祥子

◆牧牛や残して食みぬ草の花　山口県　粟屋邦夫

選者吟

### 秋蝶に後ろ姿のありにけり

俊樹

作句小見　秋の蝶が枝に羽根を休めてとまっている。それを何となく後ろから見ていたら、なんとも哀愁のある姿に見えてきた。嗚呼、蝶にも後ろ姿があるのだと気がついた。確かに夏蝶ならば真正面のほうが似合う気がした。擬人法の句だが、写生句でもある。

【送付先】〒105-8544　東京都港区芝2-5-2　曹洞宗宗務庁　禅の友係

# 曹洞 歌壇

選・長澤 ちづ

**霧状に大波の飛沫広がりて灘辺の集落の窓曇らせり**

鳥取県　山本 浩一

評　灘というのは強風が吹き、海の流れも速い海域を指すらしいので、「灘辺」の様子がおよそ推測出来る。集落の窓には大波の飛沫が霧状に吹き付けると濃やかな描写がなされる。結句には拭いても拭いても曇るという連続性が窺える。

**ひさびさに乗る車窓から眺むれば売却せし田に亡母が麦踏む**

三重県　西村 廣視

評　現実には見えないものを見ている作者の眼差しに惹かれる。先祖伝来の田を売却したという複雑な思いと、そこで営々と農作業していた亡母の姿とが交叉して味わい深い。

◆お福分けの肥えたる牡蠣の身を洗ふ流しに海の香りたたしめ
岩手県　阿部 凛子

◆巣立ちたる子のスタンドを引き寄せてひとりしみじみ方丈記読む
宮城県　木村 とみ子

◆夕あかりいまだ刈り田に残るころ落ち穂両手に畦下り来つ
岩手県　宍戸 さとる

◆あぶれ蚊の羽音を消して近寄るを叩くに少し手心加へ
島根県　横山 稟吾

◆道の駅に異国の人が更紗売る小春日和の明るき瞳
秋田県　小松 紀子

◆薬味にも鍋にも葱の使われてネパールらしき出自忘れる
静岡県　小川 健治

◆流れずに堰に止まった落葉芥いつかのわたしもその中に居り
長野県　南山 時子

◆真正面見据える虎に日輪の賀状と決めし夫は年男
北海道　菅原 三江子

◆高らかに大太鼓の音響きたり護国神社に霜光る朝
広島県　徳永 進一郎

◆つぎつぎに飛び立ちてゆく熱気球ぷかりぷかりと空に花咲く
福岡県　三吉 誠

選者詠

**秋空に芯あることを思わせてゆらりと高し皇帝ダリア**

ちづ

作歌小見　私たちの暮らしの身近な所でも働く外国の人が増えて来たように思います。そのような人たちを見詰めて詠う小松さん、小川さんの作品の温かさが良いと思いました。南山さんの歌には木が葉を落とすように吹っ切れた思いがあります。



ハガキ１通に３句（３首）以内を俳壇、歌壇別々に住所（都道府県名から）・氏名を楷書ではっきりと記入し送付先までお送りください。